



Caritas Kaleidoscope

カリタス女子短期大学

英語・英語圏文化専攻

Vol. 30

専攻新聞“Kaleidoscope”30号の軌跡

カリタス女子短期大学 英語・英語圏文化専攻の季刊新聞である“Kaleidoscope”創刊号が発行されたのが、2001年4月。それから約8年の歳月を経て、30号を数えるまでになりました(年4回発行、2008年度のみ2回発行)。創刊時の本専攻主任であられた北川宣子先生の言葉に次のようなものがあります。



英語・英語圏文化専攻 主任
前田 隆子

「この“Kaleidoscope”(万華鏡)の名称には、カリタス女子短期大学英語・英語圏文化専攻という様々な可能性を秘めた万華鏡の中で、一人ひとりが色彩豊かに多種多様に变化・成長して欲しいという私たち教員の『熱い想い』が込められています。」

お蔭様で学生たちは短大生活の2年間で大きく「変化・成長」し、卒業後の活躍ぶりも何度かこの“Kaleidoscope”でご紹介できました。まずはこの場をお借りして、今まで記事を寄せてくれた学生、卒業生、そして先生方へ感謝の気持ちを表したいと思います。ありがとうございました。

次に“Kaleidoscope”で取り上げた記事を振り返ってみたいと思います。

4月号は隔年で写真入りの教員紹介を行いました。また卒業生の満足度調査の結果を報告したり、第9号では「英語・英語圏文化専攻 いろはガルタ」と銘打って、専攻や大学の特徴をカルタ形式で紹介しました。専攻の教員みんなで知恵を絞って、どうにか44句詠んだことを昨日のように覚えています。

7月号では、福島県のBritish Hillsでの異文化体験学習の報告をすることが多かったです。1泊2日の短い滞在ではありますが、それ以降の学生たちの授業への取り組みに良い影響を与える体験になっています。

10月号では、夏期語学研修の報告や長期派遣奨学生として1年間留学した学生たちの座談会を特集しました。特に長期留学した学生たちが、辛いこと・楽しいこと等様々な経験を通してたくましく成長している姿に感動したものです。

1月号では、国内だけでなく、世界中で活躍する卒業生たちからの近況報告を掲載しました。彼女たちの活躍ぶりは、在学生たちにとって大きな刺激になったのではないのでしょうか。

毎号続いた名物コーナーとしては、「英米文学の故郷」、「太平洋を越えた人と文化」が挙げられます。これらのコーナーの記録は最後のページにまとめましたので、お読みください。また、「先生が学生だった頃」も人気があったコーナーです。これは、本学の教員がどのような学生時代を送ったのか、在学生のインタビュー形式でお届けしました。

さて、このように30号まで続いた“Kaleidoscope”ですが、2009年4月から本学が4コース制(英語・英語圏文化コース、仏語・仏語圏文化コース、現代コミュニケーションコース、社会文化システムコース)になるのを機会に、リニューアルを図る予定です。発行回数は年2回、内容は英語を学ぶ全ての人々が楽しめる新聞を目指しています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

北川宣子(「留学生座談会」等担当)



2009年4月より、英語・英語圏文化専攻は、英語・英語圏文化コースとなりますが、これまで当専攻で、特に留学と就職指導を担当してきた者として、やはり気になるのは本専攻の卒業生がどのような活躍をしているかということです。成功への橋渡し“Stepping-stone to Success”としてカリタス女子短期大学を各自がいかにか活用し、万華鏡のように多彩に変化してくれたかを見ることは、子供の成長を楽しみに思う親の気持ちと共通するところがあります。“Kaleidoscope”第20号記念号ではそれぞれの道でいきいきと活躍している卒業生の様子を特集しましたが、今回の第30号でもまた大きく成長した卒業生に触れることができました。2001年4月に誕生した「専攻新聞」が間もなく「コース新聞」となります。これからも“Kaleidoscope”を通して、卒業生の成長ぶりを見守ることができたら嬉しく思います。

浦野洋司(「聖書の英語」担当)



第30記念号おめでとうございます！この快挙を笑顔で讃え、8年間尽力した方々に感謝いたします。私の記憶に残る記事は「Sitting next to Jesus・・・」と「狭い門から入りなさい」です。強調したのは最後の晩餐で弟子たちが実は寝そべっていたという事実です。特にヨハネが身を寄せた(イエスの)「ふところ」とは、親や人が赤ちゃんや犬猫を抱える場所。神にはこのような「ぬくもり」の場があるということです。「狭い門・・・」は「多数」だけではなく、「少数」にも目を向けることの重要性を述べました。これからも本学に「少数(弱者)」への温かい「ぬくもり」や「まなざし」がいつもありますように祈念します。

伊藤知子(「英米文学の故郷」担当)



2001年4月発行の“Kaleidoscope”第1号より、「英米文学の故郷」を担当しており、2008年1月発行の第28号では、お陰さまで第25回となりました。これまでにイギリス、アメリカ、アイルランド、日本という4つの国において、作家や作品にゆかりの地域を訪れて、現地の人に話を聞いたり、資料を集めたり、写真を撮影したりして、記事の形にまとめてきました。“Kaleidoscope”創刊以前から、海外に行った時には、好んで作家の故郷や作品の舞台を訪れていたものでした。“Kaleidoscope”の中にコーナーを頂いたことにより、記事にまとめるという目的意識を持って旅に出られるようになり、感謝しています。

北脇実千代(「太平洋を越えた人と文化」担当)



このコーナーは、私が日系アメリカ人について研究していることから始めたものでした。太平洋を越えて日米間を行き来しているものに注目してみたいと思っただけからです。振り返ると、扱ったテーマは、食べ物からアニメに至るまで多岐に渡っています。実は、コーナー開始当初は、どの程度続けていけるのか不安に思っていました。しかし始めてみると、テーマは日常生活の中にあふれていることに改めて気づかされました。それほど、日本からアメリカへ、アメリカから日本へ渡ったものが多いということでしょう。もうしばらくは、このコーナーを続けて私自身もいろいろな発見をしてみたいと思います。

Patricia 保田(英文記事担当)



I'd like to give thanks to the graduate students who have contributed to Kaleidoscope over the past few years and to appeal to all future graduates to keep in contact with your teachers here after you graduate. We do not forget you. You are a very valuable resource for us, so please remember to keep in touch.

社会人入学生たちのその後

社会人入学をして、在学中の長期留学をしている人、また本学卒業後、編入学した人、教職に就いた人、3人からのメッセージです。

「留学の中間報告」

結城絢子(英語・英語圏文化専攻 2年)

私はカリタスの長期派遣奨学生としてアメリカのフェリシアン大学で勉強しています。大学の授業は9月から始まる秋セメスターと1月から始まる春セメスターとがあり、今は秋セメスターが終わったところです。このセメスターでは「心理学入門」や「発達心理学」、「ライティング」などの授業を受けました。最初は分厚い教科書と周りの雰囲気から圧倒され、授業について行くこともままならない状態でしたが、毎日の予習や復習、課題、試験などをこなしていくうちに、だんだんと理解できるようになってきました。一生懸命頑張っている教授はちゃんと名前を覚えてくださり、温かい言葉をかけて励ましてくれることもありました。クラスメイトにも恵まれ、Thanksgivingの休みの時は家に招待してもらい、とてもよい思い出を作ることができました。とはいえ、留学は楽しいだけではありません。異なる文化、価値観、言語の中での生活には、戸惑うことやつらいこともたくさんあります。しかしそれらすべてを含めて貴重な経験であり、乗り越えた後の自分の成長を楽しみに、残りの日々をしっかりと過ごしていきたいと思っています。

「編入学生生活1年目の終わりに」

幸田優子(2008年3月卒業)

想像以上に忙しかった大学3年生が終わりようとしています。この一年は、「4年生こそ楽な大学生活にしたい!」と欲張って単位を取り過ぎ、後期は、同級生の男子学生から「とてつもなく疲れていますね。」と優しい言葉をかけられたほどです。しかし、大変だからこそ達成感がある、ということの繰り返しの日々を楽しめるようになってきました。

思えば、3年半前に、子どもの手が離れたので語学の勉強をもう一度したいとカリタスの門を叩きました。カリタスへは、仏検会場で一度行ったこともあり、また駅から近く、満員電車にも乗らなくて済むとの思いもありました。結局、再び大学生活に入る家族への言い訳で、教職を取ったのが運のつきで、現在編入学生として明治学院大学で英語の勉強を続けています。編入学を決意した理由は、たまたま教育実習に行った学校が中高一貫校であったので高校の教員免許も取得したい、またもっと英語力を伸ばしたいという思いが相まったからです。結果は、大学が遠くなったこと、学年が進み専門的に深まったことなど大変なことが多くなりました。現役時代と違って、休むとその授業を聞くことができなくなると考えるようになっていたり、知りたいことがいっぱい履修できる限りしようとするなど、自分で大変な道を選んでいるようでもあります。その分、レポートを出し終えた時や試験の後のなんとも言えない清々しい達成感がこれを支えているのだということは、同じ社会人から他大学に編入した仏語・仏語圏文化専攻卒業の友人との共通した意見です。

昨年末には、英語・英語圏文化専攻の「3姉妹」と勝手に名付けていた社会人入学した友人と3人で忘年会と銘打ってお食事会をしました。話しても話しても尽きぬ思いでした。在学中から英語のみならず他の教科のこと、年齢から来る学習能率の低下対策、家庭生活との両立のことなど現役学生とは一味違う話をたくさんしてきました。その責任感の強さを心から尊敬できる「姉」と、前向きな行動力を感心してやまない「妹」が出来たことは、カリタスに入学したからこそ得た一生の宝のうちの一つになりました。三姉妹が共通して思うことは、カリタスは私たちの今日の力強いステップを後押ししてくれた、ということです。卒業して一年が経ち日に日に先生方の温かいご指導に感謝の念を覚える今日この頃です。

「英語の教職に就いて」

志水圭子(2008年3月卒業)

「好きなことを仕事にできれば毎日楽しいだろうなあ。」私のカリタス入学動機は、好きな英語を使う仕事に就くために、もう一度英語をきちんと勉強するということでした。昨年3月にカリタスを卒業し、私は4月から公立中学校の英語非常勤講師として週3日、1~3年生に英語の授業を行っています。生徒たちは40歳の新米教師に興味津々ですが、私にとっても若い彼らとの日々は驚きと楽しみ、そして学びのある充実した日々となっています。

漠然と英語を使う仕事を夢見ていた私は、入学当初から教師を目指していた訳ではありません。1年生の夏、学内の廊下で初めて話をした先輩に教職を勧められたのがきっかけとなりました。また、カリタス在学中多くの貴重な出会いが、私の進路を作っていたと思います。親切丁寧な学生と向き合ってください先生方、パワフルな社会人学生、そして私の年齢の半分なのに、私よりはるかにしっかり者のかわいい同級生たちが、在学中と変わらず今も私を支えてくれています。

短大生活はあっという間です。在学中に意識して多くの人とコミュニケーションを持ち、自分の好きなことは何かと考える続けることが大切ではないでしょうか。無限の可能性のあふれる皆さんの活躍を応援しています。



結城絢子さん(左)
(フェリシアン大学の韓国人留学生とともに)



幸田優子さん(右から2番目)
(明治学院大学のゼミの先生と仲間とともに)



志水圭子さん
(教壇にて)

【英文文学の故郷】の歴史

担当: 伊藤 知子

掲載号	取り上げた作家	取り上げた場所
Vol. 1	ブロンテ姉妹	ブロンテ・カントリー (ウエスト・ヨークシャー中心) [U.K.]
Vol. 2	トマス・ハーディ	ハーディ・カントリー(ドーセット州) [U.K.]
Vol. 3	ウィリアム・ワーズワース	湖水地方 [U.K.]
Vol. 4	ウィリアム・シェイクスピア	ストラットフォード・アポン・エイヴォン [U.K.]
Vol. 5	ロバート・バーンズ	バーンズ・カントリー(ストラスカイド州・ダンフリーズ・アンド・ギャロウェイ州) [U.K.]
Vol. 6	ウィリアム・バトラー・イェイツ	アイルランド
Vol. 7	D. H. ロレンス	ロレンス・カントリー(ノッティンガム州) [U.K.]
Vol. 8	ジョージ・エリオット	ナニートン [U.K.]
Vol. 10	ジェイン・オースティン	チョートン [U.K.]
Vol. 11	チャールズ・ディケンズ	ロンドン その1 [U.K.]
Vol. 12	ジョン・キーツ	ロンドン その2 [U.K.]
Vol. 13	ジェフリー・チャーサー	カンタベリー [U.K.]
Vol. 14	ウォルト・ホイットマン	ニューヨーク その1 [U.S.A.]
Vol. 15	O. ヘンリー	ニューヨーク その2 [U.S.A.]
Vol. 16	ジョナサン・スウィフト	ダブリン [アイルランド]
Vol. 17	ルイス・キャロル	オックスフォードその1 [U.K.]
Vol. 18	ロバート・ルイス・ステイヴンソン	エディンバラ [U.K.]
Vol. 19	ジョージ・ゴードン・バイロン	ニューステッド・アベイ [U.K.]
Vol. 21	ラフカディオ・ハーン	松江、熊本 [日本]
Vol. 22	パーシー・ビッシュ・シェリー	オックスフォードその2 [U.K.]
Vol. 23	アルフレッド・テニソン	ケンブリッジ [U.K.]
Vol. 25	A. A. ミルン	ハートフィールド [U.K.]
Vol. 26	サミュエル・ジョンソン	ロンドン その3 [U.K.]
Vol. 27	サー・アーサー・コナン・ドイル	ロンドン その4 [U.K.]
Vol. 28	ジェームズ・マシュー・バリ	ロンドン その5 [U.K.]

【太平洋を越えた人と文化】の歴史

担当: 北脇 美千代

掲載号	テーマ
Vol. 10	海外移住資料館(横浜) 全米日系人博物館 (L.A. in U.S.A.)
Vol. 11	ヒサシ・モリヤマ (日系二世、ジャズ・トランペッター)
Vol. 12	ハリウッド映画の中の日本、日本人
Vol. 14	ジーンズ
Vol. 15	Hello Kitty
Vol. 16	大リーグと日本の野球界
Vol. 18	マクドナルド
Vol. 19	万国博覧会
Vol. 22	日本のアニメ
Vol. 23	フラとハワイ
Vol. 24	シアトル系コーヒーショップ
Vol. 26	ミス・ユニバース
Vol. 27	資生堂
Vol. 28	ディズニー



Kaleidoscope 第 30 号はいかがでしたか? 皆さまのご意見・ご希望・ご質問など、お気づきの点を maeda@caritas.ac.jp までお寄せください。

2009年1月25日発行

発行責任者: 前田 隆子

編集協力: 東京工科大学
コンピュータサイエンス学部 千葉 要介

カリタス女子短期大学

Caritas Junior College

〒225-0011

横浜市青葉区あざみ野 2-29-1

Tel:045-901-5133

Fax:045-901-5066

URL: <http://www.caritas.ac.jp/english/>